

エリザベト音楽大学 建物の変遷 (年史部分に入らなかった写真を中心に掲載)



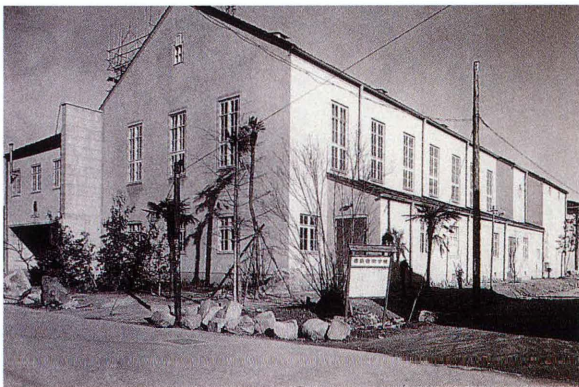
■音楽学校時代の鞆町カトリック教会



■神父館



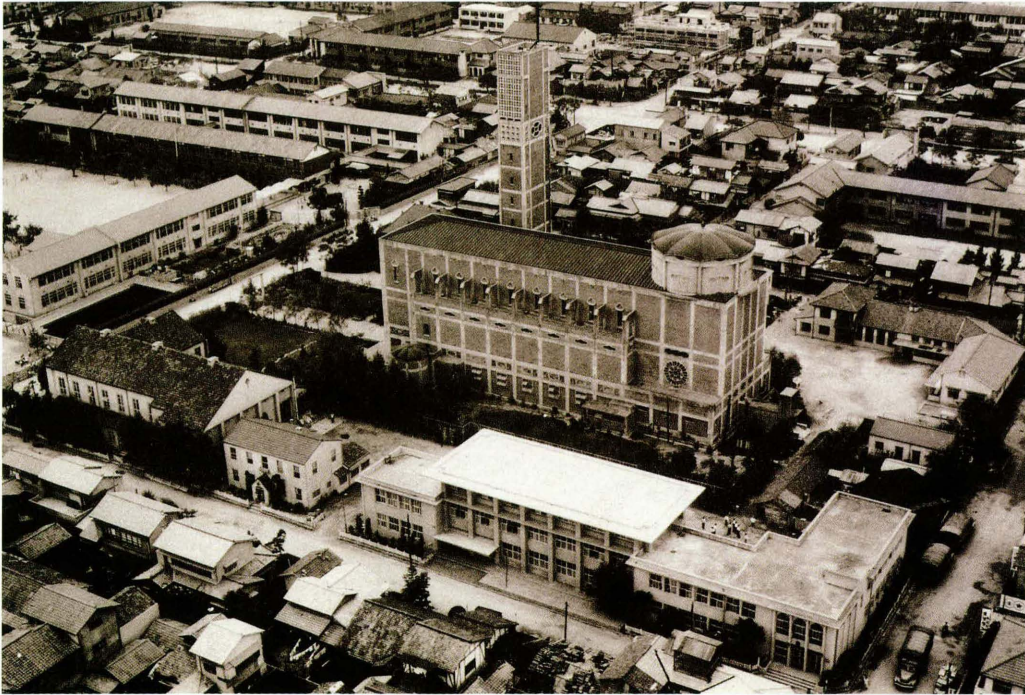
■短大初期の大学全景



■サビエルホール



■サビエルホール内部



■短大時代の全景



■南道路側

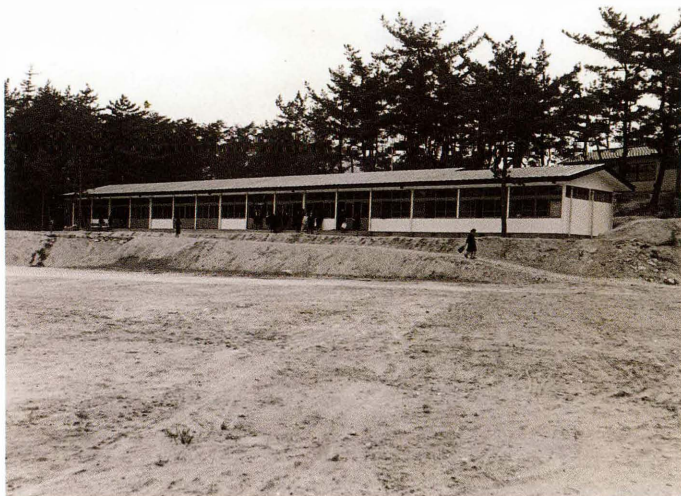


■南東角(当初はここが入口)



■旧4号館

■西条学舎



■開設当初の西条学舎



■八角堂



■現在の西条学舎全景



■西条学舎1号館



■3号館(左)、1号館、体育館

2号館 (50周年記念事業)



■現在の大学全景



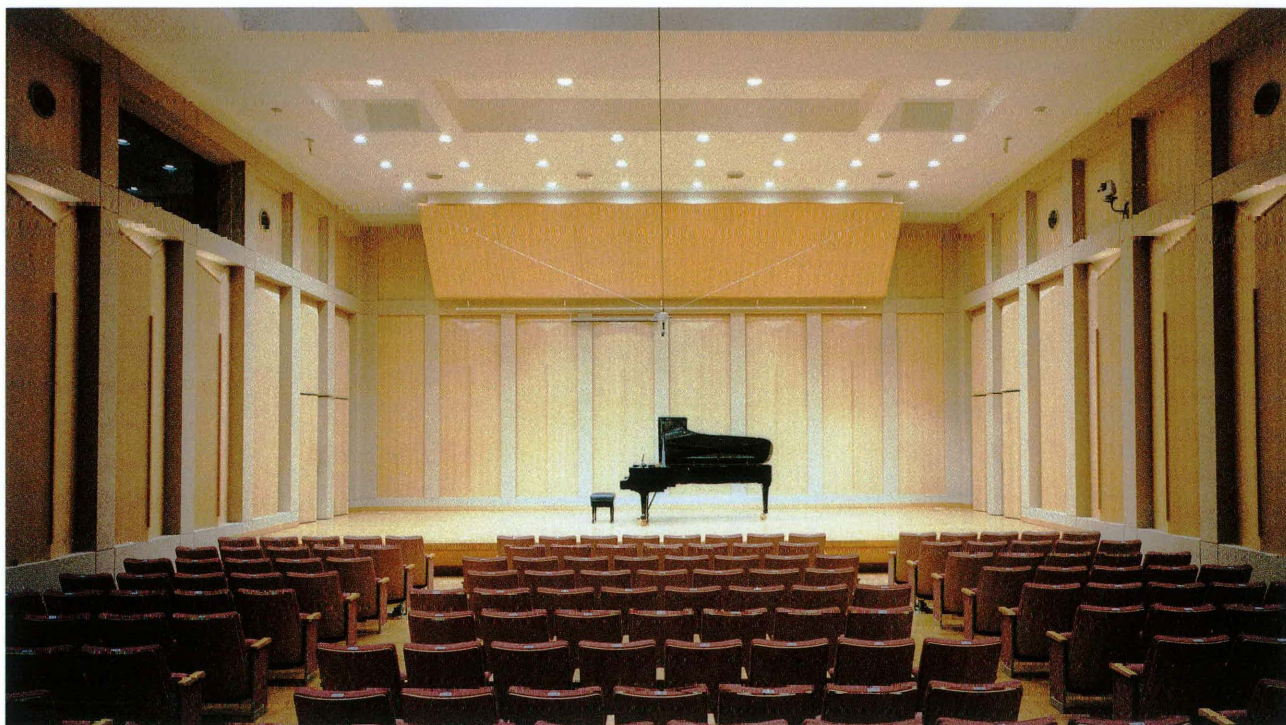
■世界平和記念聖堂側より2号館をのぞむ



■正面入口(夜)



■エントランスホール



■ザビエルホール(3階)



■大教室(5館)



■オルガン室(8階)



■アンサンブルホール(9階)

学生寮



■ゲーモールハウスの前

3つのセシリアホーム

33期 田口 恵実(正願地)

学生時代、ずっとお世話になった寮は、目まぐるしく姿をかえた。1年目は「木造の寮」、新築工事中、仮住まいをした「マンションの寮」、そして大学生生活の3年の初めに「現在の寮」が完成した。この過度期には様々な事があったが、いつも家庭的空気が満ちていた。シスター方の御尽力は言うまでもないが、学生も少数だったので交流しやすい環境であった。語り尽くせないが、少し振り返りたい。

木造の寮は、不便さを感じる様々な面がありながら、困難は皆でわかちあい、楽しむ時は皆で楽しく…という“ホーム”の雰囲気があった。大部屋と幾つかの個室があり、大部屋のしくみは、フロア中央通路の両側に、板壁で区切られた小さい部屋が続き、出入口はカーテンで、天井はふきぬけで、爪を切る音にも気を配ったのを覚えている。勉強は勉強室で行い、何でも共同で使用した。毎年3年生がシスターと話し合いながら生活上のリーダーシップをとった。寮則や数々の当番のやり方を上級生が下級生に丁寧に教え、皆がお互いに気持ち良く過ごせるように努力した。「私はここへ学びに来た」という誇りに満ちた数々の優秀な、人柄もあたたかい先輩との出会いがうれしかった。パーティーでは、家族を祝うように手作りケーキが用意され、一つ一つに新1年生の名が記されていた。出し物も多彩で、学生の楽しむ姿を笑顔で見守るシスター方、職員の方々の姿がなつかしい。

寮生活によりやく慣れた頃、ドラマの幕あけの様な出来事がおきる。当時の理事長、鎌田神父様(故)が、寮生が全員集合する夜の点呼の集まりにやって来られたのだ。大きな布の包みを持ってこられたので、友達と「おみやげかな」などと話していたりして、めずらしい来訪を皆で歓迎した。だが布の中から登場したのは現在の寮の完成予想模型だった。突然告げられた建てかえのニュースは皆を激しく動揺させ、寮長として赴任されたばかりのシスター佐々木(故)が、静かに何か思いめぐらすようなお顔で学生を見ておられたのを思い出す。(原爆の後遺症と闘いながら尽くされたシスターに心より感謝申し上げます。)1年生の私は、この事態をどう受け止めるべきかわからずにいるが、皆がここでの生活をとても大切に思っていることを、強く教えられた。その後、それぞれの選択の結果、ある方は寮を出られ、残った学生も年度が終わらぬうちに引越した。

マンションでは、3LDKの間取りに縦割り学年で4人程ずつのグループに分かれ、約1年共同生活をした。シスターの事務室や食堂などを兼ねた“つめ所”のフロアもあった。何人かで分かれても、度々ここへ出入りするので、いつも大きな家族ですごしている感じだった。点呼時は、全員が顔をあわせる唯一の機会でも、木造時代と同じ形式でアットホームな雰囲気が続いていた。共に沈黙のうちに祈り、報告や話し合いをしたり、シスターからの連絡やアドバイスをいただいた。シスターの呼びかけは、親の言葉のように思い出される。だれかが病気の時は皆へ伝えて下さり、また大学でだれかがとてもがんばった日(学内や卒論など)も、そのことを紹介して下さい、みんなで拍手をして努力を讃えあった。

新しい寮へ移り、責任ある3年生。育まれた信頼関係は、何にもかえがたい力となってくれた。春休みに合宿を行い、新生活の青写真をねった。新1年生から人数が増えることを踏まえて、次第に大きくなる寮の未来について考えた。全員が個室に入ることによって人間関係が希薄になることを憂い、「挨拶しよう」と声をかけあった。息づいていた宝を何とか保ち続けようとしていたように思う。

寮での月日は、作物の実りを忍耐強く待つ様に、時間をかけてお互いの個性を受容し、いたわりの心を持ち生活する毎日だった。その体験は、家庭を持つ今、まさに役立っていると実感している。

6月に友人の結婚式で何年かぶりに広島へ行ったが、大きくなった大学に目を見はった。ちょうどホームカミングデーの日で、玄関からのぞくと、準備中だった。エリザベトはいつまでも「ホーム」であってほしい。そんな願いを持ちながら、益々のご発展を心の中でお祈りし、感謝の気持ちでそっと幟町をあとにした。



■セシリアホーム



■現在の女子学生寮

名誉教授・法人役員・教育職員・事務職員

名誉教授

原 智恵子
テホン,ホセ
村上 清人
ベルタニヨリオ,ルチアノ
後藤 玲子
由居 学
小池 二葉
ボーン,フランス
杉田 谷道
山本 千恵子
三並 惇子

学校法人役員

理事長
小崎 次郎
理事(学長)
井上 一清
理事
水嶋 良雄
(98年5月26日まで)
理事
マクガレル,ローレンス
理事
近藤 譲
理事
バラ,ホセ
理事
山本 襄治
(98年5月26日まで)
理事
柳田 敏洋
(98年5月27日より)
理事
川野 祐二
(98年5月27日より)
監事
大下 龍介
監事
外川 直見

教育職員

[宗教音楽学科]

鈴木 仁
戸沢 真弓
永井 主憲
広沢 嗣人
ヘンゼラー,エヴァルト
水嶋 良雄
山崎 陽子
カトレット,ホアン
平林 冬樹
金澤 正剛
森川 晴美
山野 政登司
和田 之織

[音楽学科]

井上 一清
片桐 功
近藤 譲
伴谷 晃二
中山裕一郎
ベニテズ,ホアキン
マクガレル,ローレンス
植栗 彌
北林 康彦
木原 朋子
権藤 敦子
長峰 佐和
山城 育子
黒岩 英臣
黒住 彰博
小玉 好行
佐伯 康則
塚田 健一
長尾 満里
原田 宏司
和田 朋樹

[声楽学科]

内田陽一郎
小野村和弘
片岡 啓子
平田 恭子
山岸 靖
藤崎 育之
小椋 和子
桂 政子
レアーレ,マルチェッラ

紙谷加寿子
木村 正邦
榊原 哲
白石 盾紀
長谷川 顯
林 裕美子
藤井 美雪
松永 美三子
丸尾 勝代

[器楽学科]

石川 正司
佐藤 恭子
武田 忠善
對馬 寛子
中村 英昭
花房 晴美
馬場 省一
広沢 久美子
デ・グロート,アンドレ
大代 啓二
桑村 岳志
柴田 美穂
山城 宏樹
川野 祐二
シルデ,クラウス
有谿 悦子
猪熊 慶子
遠藤 さつき

大坪 加奈
小笠原真也
小田 浩美
金本 和子
小嶋 素子
鈴木 友子
砂田 直美
澄田 裕子
竹内 恵
土屋 照子
土井由美子
濱本 恵康
樋口 麻理
福間 早苗
古野 園枝
前田 麻紀
松井 芳子
森山 伸
中野 振一郎
光井 安子
森 裕
マイゼン,パウル
青山 夕夏
岩田 英憲
小坂 哲也
白尾 隆
中山 早苗
辻 功
翁 優子
四戸 世紀
三戸 恵
大藤 美和
平野 公崇
宗貞 啓二
岡崎 耕治
梅田 学
岡本 繁邦
安元 弘行
石川 博康

松倉 利之
石井 光子
中島 睦
大野 かおる
浅岡 理恵
長谷川 悟
佐藤 紀雄
三村 真弓

[教養学科目]

柳田 敏洋
水島 朝穂
寺田 朗子
バラ,ホセ
小笠原洋子
藤田 博子
内田アンジェラ
中野 美穂
中村 普子
松岡 奈美
塩谷 昌子

[教職科目]

十枝 正子
松原 秀樹

事務役職員

守下 昌輝
入江 節雄
稲里浩示郎
大沼 修二
土屋 一郎

事務職員

赤木 由紀
安足 磨由美
岡野 三枝
岡本 美帆
上峠 文
川口 令枝
河村 春子
北原 照江
塩田 あゆみ
武内 喜美子
土居 勉
橋本 径子
弘本 伸枝
藤井 真理
藤原 佳美
古土 久仁子
細谷 美也子
馬込 林
宮下安寿子
淀川 恭子

おわりに

(凡例を兼ねて)

この『記念誌』は、創立50周年記念事業の一つとして企画・編集されました。編集は委員会で審議しながら進めましたが、当初、「挨拶の部」、「50年の歩み」、「25周年史の再掲載」、「資料の部」の4部に分ける方針でいました。しかし、開校当初の事情に詳しいチースリック神父(1998.9.22 帰天)の手記を是非とも収録したいと思い、独立して「50年の歩み」の後へ入れています。

「50年の歩み」は、50年間の年譜を旧師、卒業生の手記と、その年に関する出来事の写真で構成し、1年を1ページとして設定しています。(年譜の中の太字は掲載写真があることを示しています。)ただ、写真は本学所蔵のもの以外に卒業生からお借りしましたが、いろいろな理由で掲載できないものがあったり、手記が依頼より長過ぎて全文の収容が無理なものがあったりして、せつかくの厚意を無にせざるを得なかった恨みが残ります。この点に関しては、心からお詫びを申し上げます。また、極端に写真が少ない年が数年あり(行事が少なかった)、それらの年では年譜、手記、写真のバランスが悪くなってしまいました。(「かこみ」に入っている写真は、その年と関係ないけれども是非ともどこかへ載せたかったものです。)

また、年譜はできるだけ簡潔にする必要があったので、公的な行事のみを扱っていますし、演奏会(原則として大学主催のものを収録)も資料の部に収録しますので、ここでは名称のみとしています。ただし、指揮者や会場が通常と異なった場合、及び交代した最初の時には、指揮者名、会場名を入れています。

「エリザベト25年の記録」は、創立25周年記念として故保田史郎先生が纏められた貴重な記録です。苦難の道のりを克服しながら一步一步前進してきたエリザベトを再認識する意味でも、再掲載することにしました。

「資料の部」の演奏会記録は、定期演奏会、エリザベトコンサート、スピリチュアルコンサート、クリスマスコンサート、その他の大学主催の演奏会について可能な限り収録するよう努力しましたが、資料の関係で漏れや誤記が有りました節はお許し頂きたいと思いますと同時に、今後のためにご一報くださいますと助かります。

作業に際しては、原則として曲名や作曲家名は特別の場合を除いてプログラムの通りにすること。演奏会の回数表記は、無いものや重複しているものがある通し番号に修正するのは不可能なので、やはりプログラム通りにすること。旧講堂の名称は当時の習慣通り「ザビエルホール」と濁らない。新2号館のホールは「ザビエルホール」と濁点を打つ、という申し合わせをしました。

編集を終えて感じることは、今日までの道のりが決して順風満帆ばかりではなかったけれども、全員の熱意と努力で切り開いて来たこと、さらに、創立者がよく口にした「あとは神様にまかせましょう!」という言葉のとおり、人間の及ばない力が働いていたのでは!ということです。その意味からもこの小誌のタイトルを「デーオ グラツィアス(神に感謝)」に決めました。

編集作業は困難を極めました。執筆や資料を提供してくださった方々、資料蒐集に協力してくださった方々のおかげで何とか上梓にこぎつけることが出来ました。心から深謝いたします。また、中本総合印刷、アド・プレスページのスタッフ諸氏のご好意に対しても謝意を表したいと思います。

(編集委員一同)

Deo gratias

ELISABETH UNIVERSITY OF MUSIC
エリザベト音楽大学創立50周年記念誌

1998年(平成10年)11月21日発行

発行 エリザベト音楽大学
〒730-0016 広島市中区鞆町4番15号
電話 (082) 221-0918
FAX (082) 221-0947

編集 創立50周年記念誌編集委員会

印刷 中本総合印刷株式会社
〒732-0802 広島市南区大州5丁目1-1
電話 (082) 281-4221

製作協力 株式会社アド・プレステージ
〒732-0814 広島市南区段原南2丁目3-28
電話 (082) 261-2330